

なぜ、差別の極としての戦争をなくせないのか？

今、イスラエルのガザのジェノサイド的攻撃が、周辺国の抵抗勢力叩きから、イラン攻撃まで踏み出しました。一貫してイスラエルを支持して、軍事援助をしてきたアメリカが直接的イラン攻撃にまで進んでいます。一応の停戦協定はなったようですが、歴史をきちんととらえ返すならば、力による支配は、世界をますます戦争の泥沼へと導かざるを得ないのです。

資本主義社会は「法と秩序」、そして民主主義を掲げ、皮肉なことにその名の下に戦争を起こしてきたこともあったのに、もはやそのような虚構さえも投げ棄て、「力による現状変更」をおこなっています。

二度にわたる「帝国主義間世界大戦」を経て、「帝国主義」的侵略と植民地支配から、ポストコロニアリズムのグローバリゼーションという非軍事的な支配という形だけは民主主義世界へ移行するような形成だったのに、軍事的衝突は止みません。なぜ、戦争をなくせないのでしょうか？

ネグリ／ハートの『<帝国>』から読み解く

資本主義社会の分析の基礎をなしてきたのは、マルクス派です。逆に言うと、マルクスの思想をくぐっていない社会分析は、ほとんど要をなさないので。

そのマルクス派の、現代「帝国主義論」ともいうべきネグリ／ハートの『<帝国>』で、「<帝国>的グローバリゼーション」とか「新自由主義的グローバリゼーション」と謂われる現代資本主義論を展開しました。この本は現代資本主義論として必須の文献になったのですが、押さえ損なっていることがありました。それは、現代国家＝国民国家（「民族」という幻想のもとに形成される幻想共同体としての国家（註1））は、グローバリゼーションの中で意義を失っていくとしたのですが、これは明らかな誤りでした。むしろ、国家主義的なことが資本主義の中で、跋扈してきています。

継続的本源的蓄積論として差別を読み解く

そもそも、ネグリ／ハートの現代資本主義論の流れも、ローザ・ルクセンブルクの「継続的本源的蓄積論」の影響を受けていると謂われています。「本源的蓄積論」はそもそもマルクス派の概念で、資本主義の出発点において、「囲い込み」などで農民を土地から引き離し労働者階級を生み出すというような本源的蓄積が必須であったという論理です。ローザとその思想の流れは、それは資本主義の「帝国主義」段階の武力を背景にした侵略と植民地支配として継続し、また国家の共同幻想体としての分断と包括のために（註2）、さまざまな差別を必要としているということにも顕れていると指摘しています。

国家を国家主義を維持するためには差別を必要とする

そもそも国家とは何か、ということがあります。国家とは、階級支配のための軍事的官僚的支配機構を含んだ共同幻想体と規定できます。そもそも、なぜ、階級なる支配のヒエラルヒーが存在し、搾取（註3）などが存在するのか、コモン（註4）という共有財が一

部のひとに占有され、その体制を維持するために、国家なるものがあるのです。それがあつたかも、「国民」の共通の利益ということを突き出すために、他国が攻めてくるとか、「国家＝国民の利害を追求し守る」という幻想を振りまくのです。階級支配のために国家が必要であり、国家を維持し守るという名目で、民衆を「国民」の枠におとしこめ、国家主義的な論理を振りまくのです。そもそも、被差別の側の民衆にとって、国家というところに収束させられることによって、差別の構造が維持され、国家主義的支配者の支配の構造に乗ってしまうのです。

「社会変革運動＝(それを担うグループとしての)左派」の国家主義的とらわれ

一方で、被支配者階級、被差別民衆のひとたちも、かつて圧倒的な多数派たる労働者階級(プロレタリアート)に依拠し、支配の構造から脱するために、武力的なことを含んで国家権力を掌握し、プロレタリア独裁政府を樹立しなければならない、という主張が主流派としてありました(註5)。それで、「ロシア革命」で、労農独裁ソヴィエトを建設し国家権力を掌握し、そこから「社会主義革命」へ向かおうとしたのですが、レーニンは、ドイツ革命へ、さらに先進国革命へと連動する中で、社会主義を定立しようとしたのですが、それは帝国主義の包囲網の中で革命は連動せず、「国家資本主義」にしか成らなかったのです(註6)。そういう中で、レーニン亡き後の、マルクス・レーニン主義を掲げるスターリンが、それを「社会主義国家」を樹立したと称し、その「社会主義国家」の防衛と、すなわち「国家資本主義」という体制を防衛するとして核兵器の開発製造合戦を含む軍備拡張という中で冷戦構造を作り上げたのです。それは、ソヴィエト独裁を党の独裁にすりかえ、民衆監視の秘密警察機構を構築し、アーレントが全体主義国家(註7)と規定するような共産主義とは無縁なファシズム的体制を作り上げたのです。

この項の標題に「社会変革運動＝(それを担うグループとしての)左派」の国家主義的とらわれと書きましたが、実は国家主義的にとらわれた時点で、左派性を消失してしまうのです。

戦争を無くすためには、差別をなくすためには資本主義を止揚するしかない

そもそも戦争やファシズムの原基・原起には国家主義があり、国家は階級支配の共同幻想的機構(註8)としてあるのです。冒頭に書いたように、国家を維持する、支配層が支配を維持するために、差別排外主義的国家主義を突き出していくのですから、少なくとも、戦争を無くすためには、国家を死滅への途に導く志向性の中での、現実的な取り組みの試行としていかななくてはならないのです。ところが、差別・抑圧的な体制の中では、そのような志向性も試行性もありえないのです。

今日ファシズムの蠢動というようなことが、右派ポピュリズムの跋扈という形で表れてきているとき、国家主義批判と差別主義批判を軸とした、民衆の運動が必要になっています。そのことへ向けた理論的整理も必要になっています。そのことを、わたしは「社会変革への途」という形で書きかけているのですが、その作業に入りまとめて行きたいと思っています。

(註)

1 この、共同幻想体＝幻想共同体規定は、マルクス／エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』の中で出て来る概念です。

2 分断と包括は一見矛盾する概念ですが、国家主義的なところで包括されない者は、排除というところで分断・抑圧していく構造としてあります。

3 「搾取」というのはマルクスの資本主義経済分析の中で出てくる概念で、これ自体物象化された概念ですが、ひとを労働力としてとらえる中で、労賃は労働力に対して払われるのに、実際はその労賃以上の労働をなし、剰余価値を生み出す、その剰余価値という形で労働者は搾取されている、というとらえ返しです。

4 「コモン」は、現代的にはインフラ的事業の民営化の中で出てきている概念ですが、そもそも通時的・共時的協働労働の中でなしてきた、知・情報の蓄積の中で、個人がもっているとされる能力自体がコモンであり、「労働力」自体を生産・再生産すること自体が、コモンとしての能力の「個人」へのインプットなのです。

5 押し並べて、マルクス派左派のほとんどは、スターリンが主張した「マルクス・レーニン主義」というテーゼにとらわれました。スターリン批判の後も、中でも、です。このあたりのとらえ返しは、ローザ・ルクセンブルクのとらえ返しから相対化できるので、次々号に、レーニンとローザの対話のとらえ返しをします。

6 レーニン自身が、新経済政策(ネップ)に踏み込んでいったときに、これは「国家資本主義」だとしていたのです。レーニン自身は生きている間に、ドイツ革命の可能性から、世界革命の可能性も、追求する姿勢があったのですが、スターリンは、その「国家資本主義」を「社会主義を樹立した」というところで、革命の防衛から、その「国家資本主義」の、そして自らの支配者としての地位の防衛として様々な弾圧体制をひいていったのです。

7 これ自体誤解生む規定なのです。マルクス派は社会主義を定立し、そこから国家の死滅へ向かう途を考えていました。スターリン的「一国主義的社会主義」の夢想では、国家の死滅や、共産主義への歩みではなく、真逆の道にさまよい込むのです。

8 実は、レーニンは『ドイツ・イデオロギー』が草稿に留まり出版化されず、それを読んでいなかったのも、マルクスの「国家＝幻想共同体」規定を知らなかったという伝説があるのですが、レーニンは、マルクスが書簡の中で「国家＝幻想共同体」という記述を使っているのを、自らが作成した文の中で引用しているので、「知らなかった」という問題ではないのです。これは、剥き出しの暴力支配の中では、「武装蜂起から権力奪取、プロ独政府の樹立から、社会革命へ」という途しかないとしていることのとらえ返しの問題になります。今日の政治が民主主義の時代の政治とされるのですが、トランプ・アメリカが民主主義破壊国家として顕れてきている時代に、「民主主義」をどうとらえ返すのかが、更めて問題にされているとも言い得るでしょう。このあたりの対話が今、必要になっているのではないかと思います。

(み)

(「反差別原論」への断章)(105)としても)

